

## *The Coral Island* における少年と「野蛮人」 Ballantyne が描いた「悪」

水間 千恵

### I

Robert Michael Ballantyne の *The Coral Island* (1857、以下 *CI*) は、19 世紀を代表する冒険小説として名高いが、今日では顧みられることが少ない。<sup>1</sup> 一作品として独自に分析されることよりも、むしろこの作品をもとにして創作された William Golding の *Lord of the Flies* (1954、以下 *LF*) との比較で言及されることのほうが多い。*LF* は、Golding 自身が“I think it is in fact a *realistic* view of the Ballantyne situation.” (Kermode and Golding, 201) と述べているとおり、*CI* の皮肉なパロディである。実際、*CI* の書名は、*LF* の最初と最後に登場するが、それは否定すべき前時代的価値観の象徴であって、2 作品の隔たりを強調する役割を負っているに過ぎない。

“The Coral Island Revisited”と題された Carl Niemeyer の小論は、このような両作品の関係を簡潔かつ明瞭にまとめたものとして Golding 自身が賛意を示しており (*Hot Gate*, 88) のちの批評家がしばしば引用するところとなっている。Niemeyer は次のように言う。

Ballantyne shipwrecks his three boys . . . somewhere in the South Seas on an uninhabited coral island. . . . The boys' life on the island is idyllic; and they are themselves without malice or wickedness, though there are a few curious episodes in which Ballantyne seems to hint at something he himself understands as little as do his characters. (242)

ここで注目すべきは、Niemeyer が Ballantyne の少年達に「悪意や邪悪さがない」と断言している点である。しかも、自らの主張の反証となるエピソードについては、作者にとって計算外の記述とみなして切り捨ててしまう。そして“. . . whereas Golding finds evil in the boys' own natures, it comes to Ballantyne's boys not from within themselves but from the outside world.”(242)と結論づける。

このような見方は Golding による Ballantyne 作品の解釈とも重なることから、批評家達の間ではこれまで無批判に踏襲されてきた。<sup>2</sup> 当然、そこからひきだされる結論も、多少の表現の違いがあるとはいえ、大筋においては似通ったものとなっている。すなわち、Ballantyne が大英帝国の繁栄を無邪気に称えるのに対して、Golding は文明そのものへの懐疑を示しているのだと (Tiger, 51)。その結果、両作品への評価も「前世紀の子ども向け大衆娯楽読み物」と「深遠な思想を内包した 20 世紀の傑作」という単純な図式化となる。実際、*LF* の批評史をひもとく限りにおいて、*CI* はテーマや人間観が浅薄な前世紀の娯楽読物として貶められ、切り捨てられてきたといっても過言ではないのである。<sup>3</sup>

しかしながら、これらの批評家達は *CI* の表層から「冷笑されるような」(Dick, 20) 思想のみをすくいあげ、それとの対比によって、Golding 作品を位置づけてきたようにもみえる。もちろんここで、*LF* が Ballantyne 作品を否定する価値観を有しているということ自体に異を唱えるつもりはない。しかし、*LF* を批評するための一材料として言及されたにすぎない *CI* の解釈には限界もあると思われる。以下、本稿においては、独立した一作品として *CI* を再読し、そこに描かれている「悪」や人間観が、従来の批評家達の言うようなものであったのかどうかを再検討したい。これは同時に、19 世紀イギリスにおける植民地主義の道具としかみなされていない *CI* の今日的評価を見直す作業でもある。その結果をもって、*LF* 批評への新たな手がかりもまた、得ることができるだろう。

## II

Martine Green は、文学カテゴリーとしてのロビンソネイド (Robinsonade) を、「白人の膨張的帝国主義の文学的反映」(2) と定義する。そして、Defoe 作品と比べて *CI* には、攻撃的・軍事的性質が強いと指摘する (119-22)。Green が Ballantyne 作品の中に見ているのは、対イングランドとの関係において自らが被征服者であるにもかかわらず、対外的に大英帝国の価値観の推進者として機能したスコットランド人作家の二重性なのである。

*CI* は、Ballantyne の少年向け長編冒険小説としては、*The Young Fur Traders* (1856) と *Ungava* (1857) に続く 3 作目にあたる。前 2 作は、北米大陸を舞台に主人公の少年がさまざまな経験を積み重ねながら成長していく物語で、そこにはハドスン湾会社と契約を交わして 16 歳でカナダに渡り交易に従事した Ballantyne 自身の実人生が反映されていた。舞台が異なるとはいえ、*CI* でも同

様のストーリーが展開されるが、物語は内容上、孤島生活でのサバイバルを描いた前半部（1～21章）とそれ以降とに二分して考えることができる。さらにこの後半部については、海賊と行動をともにした Ralph 少年の見聞（22～28章）と、サモア人少女の救出譚（29～35章）とに分けることができる。

前半部においてサバイバルを展開するのは、3人の（青）少年である。リーダー的存在の Jack は 18 歳の勇敢で博学な美青年、語り手でもある Ralph は生真面目で内省的な 15 歳、13 歳の Peterkin はいたずら好きなおどけものである。彼らは自然の恵みをいかして衣住食を整え、島の内外を探検し、自然観察と博物学的考察にも精を出す。自然のもつ圧倒的な力や荘厳な美しさを前にして敬虔な気持ちになることはあるものの、孤独に悩まされたり、後悔の涙にかきくれたりすることはない。食料の確保、住まいの整備、衣服の調達といった生活に必要な活動も、少年達にとっては、地道で過酷な労働ではなく、楽しい遊びの延長にすぎない。このように前半部は、*Robinson Crusoe* を下敷にしてはいるものの、ストーリーの展開がはるかに楽天的で、舞台となる島も、ユートピア化された「冒険・観光・ロマンのアドベンチャーランド」（岩尾, 22）と化している。

他方、後半部には道徳的・宗教的主題が派手なアクションとともに詰めこまれており、前半部よりも概して評価が低い（Townsend, 42）。少年達が遭遇する危難の描写は、前半部と比べてさらに大袈裟で刺激的になる。さらに、原住民や海賊の残虐行為が次々と描かれ、「悪」の存在に焦点があてられると同時に、死を前にした悪漢の改悛と異教徒を改宗させる宣教師の威光がおりこまれ、信仰の至高性・有用性が強調されている。

このように見てくれば、CI のストーリーがロビンソネイドのコンベンションにのっとりた図式的なプロットに沿って展開していることは否定できない。しかしながら、楽観性の強い前半部においてさえ、少年達の幸福に満ちた生活に影を差す言及がないわけではない。上陸した直後ですら、Ralph は“these lovely islands were very unlike Paradise in many things.” (28) と述べて、そこが必ずしも無垢な楽園ではないことを証言している。しかし、従来の批評家達は、この問題を植民地主義に根ざした作品の性質と関連づけて説明してきた。たしかに、少年達が無垢ならざるものの存在にどれほど言及するにせよ、そこで問題とされているのが異教徒の原住民や海賊であり、少年達自身の汚れは描かれていないとするならば（Kermode, 257）、CI で描かれる「悪」は、植民地支配を正当化

するための道具でしかないということになる。実際、作品の前半部で度々言及される島についての相対立する要素、すなわち楽園性と非楽園性は、前者が美しさや豊穡さという自然環境に、後者が肌の色の濃い住民達に、それぞれ仮託されているようにも見える。<sup>4</sup>しかし、作品に通底する価値観が、「少年達 = 無垢」「原住民・海賊 = 悪」という単純な二分法だと一足飛びに断じることは誤りである。精読すれば、少年達が無垢でないことは自明であり、しかも彼らが自らの内に潜む「悪」に気づいていることもわかるはずである。

### III

まず原住民であるが、一見すると、彼らは見かけも行動も典型的な悪役として描かれている。たとえば、<sup>いくさ</sup>戦化粧を施した原住民は「おぞましい怪物」と形容される。

His hair was frizzed out to an enormous extent . . . the man's body was as black as coal. . . . He was tattooed from head to foot, and his face, besides being tattooed, was besmeared with red paint, and streaked with white. Altogether, with his yellow, turban-like hair, his Herculean black frame, his glittering eyes and white teeth, he seemed the most terrible monster I ever beheld. (173-4)

しかも、彼らは仲間をも殺して食べ、自分達の子どもを池に投げ込み、大ウナギの餌にする。儀式以外にも無意味な殺戮を日常的に繰り返すその残虐非道ぶりは、海賊ですら“Beelzebub himself could hardly desire better company.” (214) と思うほどである。

そもそも、黒い肌とぎらぎらする大きな目をもつ南の島の食人種は、ロビンソネイドにつきもののキャラクターであり、北米大陸の先住民やアフリカの黒人などとともに、ヴィクトリア朝の冒険小説においては必ず悪役、敵役を割りふられていた。彼らの運命は最初から決まっている。白人の武力によって抹殺されるか、あるいはキリスト教に帰依し白人に従属するかのいずれかである。正木恒夫は、このようなロビンソネイドにおける野蛮人モチーフに関して、「侵入者と先住者とのすりかえ」という植民地主義を支える根源的な虚構の一つを見出している(141-2)。この指摘はもちろん *CI* にもあてはまる。本来は「先住民」であるはずの原住民が、楽園の秩序を乱す侵入者として描かれているのだ。彼らは少年達の生存を脅かすため、その排除に必然性と正当性が認められ、そ

のことを強調するために、侵入者の異質さを際立たせ、それを「悪」として表象することが必要になる。結果として、原住民は外見も行動も、「悪」の権化のように描かれることとなる。

しかし、Ballantyne は、こうした伝統的「野蛮人」像を持ちこむだけでなく、彼独自の用い方をしている。それは、従来どおり原住民を異質な存在として描くことで少年達と切り離す一方で、両者の同質性をもまた物語の中で強調している点である。たとえば、火起こしや靴作りなど、少年達がサバイバルに用いる技術は原住民に由来するものとして描かれるが、これは、本国イギリスの技術や道具を復元しようと努めた元祖 Robinson Crusoe とは対照的である。<sup>5</sup> さらに、Ralph は、原住民の子ども達が遊んでいるところを、“In another place were a number of boys engaged in flying kites, and I could not help wondering that some of the games of those little savages should be so like to our own, although they had never seen us at play.” (234-5)と描写する。ここでは、「野蛮人」と「我々自身」の隠れた相似性を、登場人物自身がはっきりと確認している。

また、サメに襲われて仲間が死んだのちも平然と遊び続ける原住民の様子を描いた場面(239-40)の解釈も問題となる。Green は、倫理観の欠如という観点から、これを、原住民と白人の差異を強調する示すエピソードだと考える(122)。しかし、少年達のモラルも、さほど誉められたものではあるまい。難破した直後に浜辺で船長の長靴を発見した際、少年達は「船長が泳ぎやすいように海中で脱いだに違いない」(28)と自分達に都合のいい仮説を提示する。船長の運命も、また他の乗組員たちの生死も、気にかけてのは束の間のことで、少年達の関心事はもっぱら長靴の再利用にあった。生死の標識としての長靴という同じ小道具を用いた Golding の第3作 *Pincher Martin* (1956)の読者であれば、CIにおける登場人物達の倫理観について Green とは逆の結論を導き出すに違いない。<sup>6</sup>少年達の態度が暗示するのは、仲間の死すら長く記憶にとどめることのない忘れっぽさであり、これぞまさしく原住民と相通じる性質なのである。このように考えれば、Petekin が“I never could keep in my mind for half-an-hour the few descriptions I ever attempted to remember.” (64)と述べて、自らの最大の欠点を長々と説明することもまた、看過しえない重要な細部となりうるだろう。

「悪」を象徴するもう一つの存在である海賊についてみれば、彼らは白人であるが、“savage”と呼ばれ、原住民と等価値化されている。彼らは商人を自称してはいるものの、Ralph を島から誘拐同然に連れ去った手口や原住民に対す

る蛮行の数々をみればまさしく「海賊」そのものであり、ギリシア風の帽子をかぶり、腰に絹のショールを巻きつけ、“the mean, rascally expression” (197) を浮かべた典型的悪漢として登場する。しかしその一方で、たとえば、秩序が行き届いた彼らの船は英国海軍の戦艦に喩えられている(199)。また、海賊の首領は“lion-like villain” (200) と描写されているが、「ライオンのような」とは、ヴィクトリア朝の理想的な英雄を形容する言葉であり、事実それは作品中で Jack に対して使われている(7)。このように、海賊についても、性質や外見の点で少年達との差異が強調されると同時に、同質性も暗示されているのである。

なにより重要なことは、「野蛮人」たる原住民・海賊と同じ残虐な本性が、主人公の少年達自身にもかいまみえる点である。たとえば、食料にするあてもなく、多くの子豚を連れた母豚を衝動的に殺す Peterkin の行為は、彼自身の内に潜む悪を感じさせる。<sup>7</sup>

Suddenly he levelled his spear, darted forward, and, with a yell that nearly froze the blood in my veins, stabbed the old sow to the heart. Nay, so vigorously was it done that the spear went in at one side and came out at the other!

“O Peterkin,” said I, going up to him, “What have you done?”

“Done? I’ve killed their great- great-grandmother, that’s all,” said he, looking with a somewhat awe-struck expression at the transfixed animal. (127)

動物を殺すことの正当性は、スポーツや食料補給の手段の場合にのみ認められるのであって、このような行為は当時の道徳観に照らしても誉められたものではない。<sup>8</sup>「血も凍るような叫び声」をあげて、豚に襲いかかる Peterkin の姿は、棍棒や槍を手に人間に襲いかかる原住民の姿と重なる。彼らが串刺しにして食べる人間が“long pig” (220) と呼ばれることも、少年達と原住民の相似性を強調するだろう。このように考えれば、血塗れの棍棒を振りまわして戦う際、Jack の姿が、死闘の相手である巨漢の原住民と区別しがたくなるのも偶然ではあるまい(177-8)。Ralph についても、海賊と行動を共にしている時に示した大胆さに、悪党である海賊達と相通じる性質が読みとれるはずである (Bristow 106)。

このような少年達の狂戦士 (Berserker) じみた行動を、Green は「先祖返りの」と形容し、奨励されるべきイギリス青年の資質 (勇猛さ) と結びつけて考えている (119)。しかし、少年達の行動は国家的理想というよりも、むしろ彼ら自身が内に抱える影の部分と結びついているように見える。たとえば、血ま

みれの殺戮シーンに遭遇した際に、Ralph は“I felt my heart grow sick at the sight of this bloody battle, and would fain have turned away, but a species of fascination seemed to hold me down and glue my eyes upon the combatants.” (173)と告白する。ここには、残虐な行為を否定しきれず、「悪」に引きよせられている少年の本質が暗示されている。彼は、おびえてはいるものの、「悪」の抗いがたい魅力に惹きつけられて興奮しているのだ。

#### IV

少年達と野蛮人（原住民・海賊）との間に見られる以上のような相似性は、少なくとも *LF* の批評史の中では、これまで見過ごされていた部分であり、*CI* の批評においても、決して重要視されてこなかった。上述の Green のような議論の他にも、少年達の野蛮さや獣性を、故国を離れた彼らの精神的解放感に結びつけ、あくまで遊びの一環だとする者もいる（Phillips, 60）。また、“noble savage”という概念に見られるような野生的自然児を理想化する子ども像との関係で解釈することもありえよう。<sup>9</sup>しかし、作品で描かれる少年達の獣性は、文学伝統の影響よりも Ballantyne の執筆目的と密接に結びついているように思える。Ballantyne が白人である主人公達の「悪」を明確化しようとする時、我々が出会うのは、彼が信じた人間観であり、読者に教授しようとした道德観なのである。

... I am struck with the strange mixture of good and evil that exists not only in the material earth but in our own natures. ... [W]e had seen the quiet solitudes of our paradise suddenly broken in upon by ferocious savages, and the white sands stained with blood and strewed with lifeless forms; yet among these cannibals we had seen many symptoms of a kindly nature. (187-8)

ここで Ralph は、原住民を含めた「我々」の中に「悪」が存在することを認めている。しかも、彼は原住民を「野蛮人」と貶める一方で、彼らの中にも善につながる性質のきざしがあると明言する。残虐な場面に慣れて、無感覚になったことに気づいた Ralph が、“I shuddered when I came to think that I too was become callous.” (243)と述べる時、彼は、自らの内に潜む「悪」を自覚し、愕然としているのである。彼の受けた衝撃は、きっかけさえあれば容易に残虐化する人間の本质を、読者に強く印象づけるだろう。

墮落しやすい人間性への警鐘として、西洋世界の人々が潜在的に抱いていた原住民化への恐怖に訴えかけることは、非常に有効な手段だったはずだ。この意味で、ロビンソネイドのプロットは、Ballantyne に格好の材料を提供したのである。つまり、彼は、白人キリスト教徒である少年達と「野蛮人」との同質性を強調しつつ、両者を隔てる「壁」を作品中で明示することによって、読者の採るべき道を示しているのである。Stuart Hannabuss は、この「壁」が文明と信仰だと指摘する（58-9）。ここにおいて、原住民と白人である海賊とが「野蛮人」として一括されていることの意味も明らかになる。すなわち、海賊は信仰を持たないがゆえに、異教徒である原住民はそれに加えて文明も持たないがゆえに「野蛮人」なのである。<sup>10</sup>

そもそも、若干 24 歳にしてスコットランド自由教会の長老に任命された Ballantyne にとって、執筆は単なる収入源ではなく、若者を導くための手段としても非常に重要な意味を持っていた。キリスト教思想に基づいて若者を導くという彼の使命感は、“young people are my mission” (Quayle, 133) という言葉からもうかがわれる。執筆に際して彼が常に念頭においていたことは、文明と信仰の重要性を少年達に伝達することだったのである。もちろん、ヴィクトリア朝を生きた Ballantyne に人種的偏見が皆無だったはずはない。<sup>11</sup> しかし、人間の本質についての彼の見解を探っていくと、作品には福音主義者としての側面が強く打ち出されていることがわかるはずである。序文で“savages . . . are very much like us.”と述べている *Red Rooney* (1886) や、“Jesus Christ . . . able and willing to save me from sin, as He is to save all sinners--even the chief.” (18) と記した回想録 *Personal Reminiscences* (1893) など、他の著書を読んでいけば、彼が信じていた人間観はいっそう明確に把握できるだろう。すなわち、「白人であろうとなかろうと人間は誰しも罪深いものであり、信仰を維持することによってのみ救われるのだ」と。CI においても、Ballantyne の執筆目的は、物語の結末部で示される原住民宣教師の説教に集約されている。

. . . he [native teacher] pressed us more closely in regard to our personal interest in religion, and exhorted us to consider that our souls were certainly in as great danger as those of the wretched heathen whom we pitied so much, if we had not already found salvation in Jesus Christ. “Nay, further,” he added, “if such be your unhappy case, you are, in the sight of God, much worse than these savages . . . for they have no knowledge, no light, and do not profess to believe;



while you . . . have been brought up in the light of the blessed Gospel, and call yourselves Christians. . . . [Y]ou, if ye be not true believers, are traitors!” ( 302-3 )

原住民宣教師が少年達に語りかける上記のような言葉は、Ballantyne が少年読者に向けて発していたメッセージそのものだとみなすことができるだろう。<sup>12</sup>

## V

以上のように見てくると、CIで描かれた「悪」についてのこれまでの見解も修正を余儀なくされる。Ballantyne は、「少年達に悪意や邪悪さが無い」と考えていたわけでもないのはもちろんのこと、少年達を自らの「悪」に無自覚なままにさせていたわけでもない。従来、植民地主義批判の流れの中で、CIは人間が本質的に抱える「悪」というものに無頓着で、それを徹底して外在的なものとして描き出していると冷笑されてきた。しかし実際には、他者としての「野蛮人」のみならず、白人キリスト教徒という自己の内部にも「悪」が存在することを提示していたのである。Ballantyne が描いたのは、特異な経験を通じて「悪」が身近なものであると自覚するに至る少年達の精神的成長である。

もちろんCIにおいては、最終的に「悪」を「野蛮人」に引き受けさせることで、読者の採るべき道を示していたのも事実である。その結果、語り手 Ralph の視点に同化して読めば、自らの潜在的な「悪」を意識しつつも、最後には野蛮人化しないための方法を知るため、読者は自己と「野蛮人」の間に確固たる線引きを行なうに至るであろう。Golding が批判したのもまさにこの点であることは間違いない。しかし、作家の道徳的態度・執筆姿勢を考慮し、対象読者層と時代的制約などにも思いを巡らせるならば、Ballantyne 作品と Golding 作品の溝はどれほどのものになるであろうか。

CIに限らず Ballantyne の描いた世界は、現代読者の目には荒唐無稽な夢物語だと映りがちである (Green, 122)。しかし、Ballantyne と同時代の少年読者にとってはやや事情が異なっていた。むしろ、それらはかなり身近な空間として把握されていたと推測できる。当時のイギリス人少年にとっては、ハドスン湾会社の社員として北米大陸の雪深い荒野を駆けめぐること、見習船員として南洋航路に漕ぎだすことも、実現可能な人生の選択肢の一つでありえた。現代人の目にはステレオタイプでばかばかしく見える人食い人種や海賊なども、当時は十分に現実味のある存在として認識されていたのである。<sup>13</sup>

また、合理主義、実利主義、科学的思考尊重といった時代精神の要請から、当時の冒険小説作家はこぞって真実味のある物語世界を構築しようと努めたが、なかでも Ballantyne は、事実在即したできごとを写實的に描写することを自らの信条とし、児童書市場においても、その点で高い評価を得ていた作家であった。<sup>14</sup> この点と、さらには、前節で述べたようなキリスト教思想に基づく若者の教育という作家自身の目的意識ゆえに、Ballantyne 作品は、少年達に与えるべき道徳教育的性質を有しているとみなされ、当時の親達に広く受け入れられていたのである。LF と比較される中で今日 CI に与えられる否定的見解の背後には、このような時代の変遷に伴う受容の変化が存在することも銘記すべきであろう。

人間の本質の問題、換言すれば、人間が抱える「悪」の問題と取り組んだという点において、Ballantyne と Golding に大きな隔たりはない。両作品が提示する結論の違いは、作品の質や作家の力量というレベルではなく、文化や思想面での社会的変化との関連で考察されるべきものであろう。また、人物造形の単純さや幸福感の達成を目的とする物語構造など、Ballantyne 作品がもつ形式上の諸特徴も、Golding 作品との優劣を論じる際に引き合いにだされやすいが、それらは創作技法の差異であって、主題の問題と混同されてはならないはずだ。そして実のところ、主題との関わりでいえば、LF にも「野蛮人」に仮託された「悪」、救済のありかとしての信仰など、Golding 自身が Ballantyne 的位置にとどまっている部分も多く見受けられるのである。Golding が Ballantyne をどのように書き換え、そして実際にどれほど改訂できているのかを再度検証してみる必要があるのではないか。しかしその点については、また別の機会に譲ることにしたい。<sup>15</sup>

本稿の一部は、1999年4月25日に開催された日本イギリス児童文学会中部支部例会において口頭発表を行ったものである。

### 註

- 1 OUP 版には初版年が 1858 年と記載されているが、実際には 1857 年末だったとされている(Quayle, 112)。確かに British Library 所蔵の初版本の奥付けは 1858 年になっているが、カタログ上には 1857 年の推定出版年が付記されている。
- 2 たとえば Leighton Hudson (23-4)、Virginia Tiger (49-50)などを参照されたい。
- 3 CIを材源とする LFの批評史については、Neil McEwan (147-62)がまとめている。

- 4 船員達が Ralph に語った南洋のさんご島についての記述は、この好例であろう。  
 “They told me of thousands of beautiful, fertile islands . . . where summer reigned nearly all the year round; where the trees were laden with a constant harvest of luxuriant fruits; where the climate was almost perpetually delightful; yet where, strange to say, men were wild, bloodthirsty savages. . . .”  
 (4)
- 5 Green は、これがロビンソネイドの伝統上、重要な変更点だと指摘している(122)。
- 6 この作品では「長靴を脱ぎ捨てる」ことで嵐を生き延びた主人公 Chris の孤島生活が描かれる。しかし、最後に彼が「長靴を履いたまま」死んでいたことがわかり、それまでの物語がすべて幻想だったと明かされる。結末で述べられる「長靴を脱ぐ暇もなかった」のだからたいして苦しまずに死んだはずだという検死官の言葉は、「長靴を脱ぎ捨てたのだから生きているだろう」という Ballantyne 作品の楽観論と見事な対照性をなしている。
- 7 少年たちに「悪意や邪悪さがない」と述べた Niemeyer も、この点は指摘している(242)。
- 8 だからこそ、Peterkin はあと知恵で「靴を作る皮が欲しかった」と言い訳する。
- 9 ロビンソネイドへの Rousseau の影響は広く認められており、Green の著書においては、一章が *Emile* (1762) に割かれている。
- 10 この結果、作品では「白人キリスト教徒 改宗した原住民 棄教した白人 異教徒の原住民」という序列が示されることになる。
- 11 *CI*の中で、たとえば Peterkin は次のように言う。“Of course, we’ll rise, naturally, to the top of affairs. White men always do in the savage countries.” (16)
- 12 19 世紀以前の児童文学作品では、作者が登場人物の口を借りてその意図を直接語ることは少なくなかった。その特徴が顕著なのは、Mrs. Barbauld や Mrs. Trimmer 等に始まる教訓主義作家の作品群であるが、Ballantyne の時代にあっても、その影響は消えていない。
- 13 以下の記述は、作品の舞台となった地域の状況を知る上で参考になる。“For the first half of the nineteenth century, the Fiji Islands were as wild, violent, and cannibalistic as any place on earth.” (Dodge, 171) また、Harvey Darton が、Ballantyne をはじめとした 19 世紀中葉の冒険小説作家達を評して“They opened . . . the door of contemporary romance, of life in books not drawn from the past, but close at hand and accessible in very truth to those who read it about it.” (253)と述べていることも、今日の評価とのずれを証明している。
- 14 もちろん、その博物学的知識には明白な誤りもあるが、Ballantyne 自身が事実には忠実たらんと努めていたことは回想録にも記されている。( *Personal Reminiscences*, 12-3 )
- 15 拙稿“How Golding Revises Ballantyne: A Reflection on the ‘Evil’ and the ‘Relief’ in *Lord of the Flies*” 『英語圏児童文学研究 Tinker Bell』46 (2001. 2):

32-49 を参照されたい。

### 引用文献

- Ballantyne, R. M. *The Coral Island: A Tale of the Pacific Ocean*. 1858. Oxford: OUP, 1991.
- . *Red Rooney, or The Last of the Crew*. London: Nisbet, 1886.
  - . *Personal Reminiscences in Bookmaking*. London: Nisbet, 1893.
- Bristow, Joseph. *Empire Boys: Adventures in a Man's World.* London: Harper Collins Academic, 1991.
- Darton, F. J. Harvey. *Children's Books in England: Five Centuries of Social Life*. 1932. 3d ed. Revised by Brian Alderson. London: Cambridge UP, 1982.
- Dick, Bernard F. *William Golding*. New York: Twayne, 1967.
- Dodge, Ernest S. *Islands and Empires: Western Impact on the Pacific and East Asia*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1976.
- Golding, William. *Lord of the Flies*. London: Faber and Faber, 1954.
- . *Pincher Martin*. London: Faber and Faber, 1956.
  - . *The Hot Gates and Other Occasional Pieces*. London: Faber and Faber, 1965.
- Green, Martin. *The Robinson Crusoe Story*. University Park: Pennsylvania State UP, 1990.
- Hannabuss, Stuart. "Ballantyne's Message of Empire." *Imperialism and Juvenile Literature*. Ed. Jeffrey Richards. Manchester: Manchester UP, 53-71.
- Hodson, Leighton. *William Golding*. 1969. New York: Capricorn Books, 1971.
- Kermode, Frank. "The Coral Islands." *The Spectator* 201 (August 22, 1958): 257.
- Kermode, Frank, and William Golding. "The Meaning of It All." *Books and Bookmen* 5 (October, 1959): 9-10. Rpt. in James R. Baker and Arthur P. Ziegler, Jr., ed. *William Golding's Lord of the Flies: CaseBook Edition*. New York: Perigee, 1983. 197-201.
- McEwan, Neil. *The Survival of the Novel: British Fiction in the Later Twentieth Century*. Totowa, NJ: Barnes & Noble, 1981.
- Niemeyer, Carl. "The Coral Island Revisited." *College English*, 22 (January, 1961): 241-5.
- Phillips, Richard. *Mapping Men and Empire: A Geography of Adventure*. London: Routledge, 1997.

- Quayle, Eric. *Ballantyne the Brave: A Victorian Writer and His Family*.  
London: Rupert Heart-Davis, 1967.
- Tiger, Virginia. *William Golding: The Dark Fields of Discovery*. London:  
Calder and Boyars, 1974.
- Townsend, John Rowe. *Written for Children: An Outline of English-Language  
Children's Literature*. 1965. Sixth ed. Lanham, Md.; Scarecrow Press.  
岩男龍太郎、『ロビンソンの砦』青土社、1994.
- 正木恒夫、『植民地幻想 イギリス文学と非ヨーロッパ』みすず書房、1995.